

私にとっての現代日本学

橋 本 雅 之

私は本来、国文学とくに奈良時代の古風土記・古事記・万葉集などを研究テーマとしてきた。その研究は、本居宣長をはじめとする国学者の研究を範とする訓詁注釈という、伝統的な国文学の方法に基づくものであった。したがって、私は国文学という限られた世界の中で、きわめて内向きな姿勢で研究をスタートさせたのであった。

その私が、現代日本学の方向に目を向けることになったのは、今思い返せばユング派の分析心理学者河合隼雄の著書『昔話と日本人の心』と出会ったことに端を発する。二十代後半に、はじめて『昔話と日本人の心』を読んだ時の衝撃は、今も忘れられない。国文学という狭い世界にいた私にとって、この本との出会いは外の世界を垣間見る機会となった。そしてその時、

「自分もこんな研究をしてみたい」

と痛切に思ったことを、今も鮮やかに覚えている。それ以来、私は河合隼雄の著作に親しみ、それを通してユング心理学や仏教思想にも関心を持つようになった。その結果として、日本神話の地下水脈に流れる日本人と日本文化の深層意識に強い関心を持つようになったが、まだそれを自分の研究テーマとして見定めるには至らなかった。

私が、その問題を自立的に考えてみようと思うようになったきっかけは、「見る側のタブー」をめぐる、禁を犯した「見た側」の「罪意識」の問題に直面したことにある。それまでの研究においては「見られた側」の「恥意識」と、それを動機として潔く去っていく美意識に対する関心が高かった。それに比して、「見た側」の「罪意識」とその解消に関してはあまり問題にされることがなかった。したがって、この問題については、自分で考えを構築していく以外には道がなかった。そんな時にフロイト派精神分析学の第一人者、北山修先生と

出会った。北山先生の日本神話をめぐる心理学的分析は、ユング派の分析とは大きく異なっていた。そして、北山先生の考察には日本人の「罪悪感」に関する深い洞察があった。その分析と考察に導かれて、私は、狭い国文学の世界の扉を開いて、日本人の心の世界へと入っていったのである。その研究成果は、北山先生と共著の『日本人の〈原罪〉』（講談社現代新書）と『引き算思考の日本文化』（創元社）として結実した。

宮川泰夫先生が、皇學館大学に蒔かれた現代日本学の種子が、今後どのように芽吹きそして育っていくのかは、今のところまだ分からないけれども、私にとっての現代日本学のテーマは、日本人の深層心理に注目して、その価値観を掘り下げて、それを取り出して世界にも通用する倫理観へと高めていくことである。

一期一会。

宮川泰夫先生との出会いによって、私の学問にも帰っていきべき故郷があることを知った。それは私にとって、大きな喜びであり誇りでもある。私の現代日本学は、今やっと自律的に自立し、内発的な日本学の構築に向けてスタートしたばかりである。